全海運所属組合の横顔

連載　第 12 回

四国地方海運組合連合会

【組合の概要】

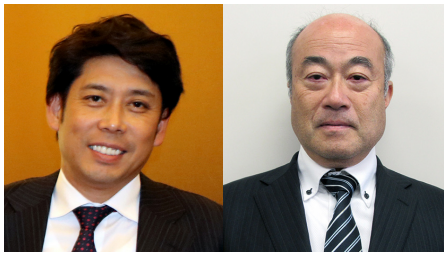
事　務　局　〒 760-0020
香川県高松市錦町 1-21-3　開拓ビル 4 階
電話 087-821-6634　FAX 087-821-3778
JR 高松駅下車徒歩 3 分

理　事　長　村田　泰　　八重川海運㈱代表取締役社長

事 務 局 長　鋸本（おがもと）　光司

事務局員数　男子 1 名（事務局長含む）、女子 1 名

組 合 員 数	登録運送事業者	37 社	
（休業除く）	届出運送事業者	1 社	
	登録貸渡事業者	143 社	
	届出貸渡事業者	2 社	
	利用運送事業者	39 社	
	合　計	222 社	
所属船腹量	貨物船	201 隻	304,425 重量ﾄﾝ
	油送船	53 隻	60,552 ㎥
	曳　船	1 隻	2,000 PS
	台　船	12 隻	11,258 重量ﾄﾝ
	バージ	11 隻	33,520 重量ﾄﾝ
	プッシャー	13 隻	4,588 重量ﾄﾝ
	合　計	291 隻	416,343 重量ﾄﾝ㎥ PS



村田会長（左）と鋸本事務局長

事務局のある高松市錦町
(Yahoo! map)

四海連の入居する開拓ビル

最大多数党は徳島

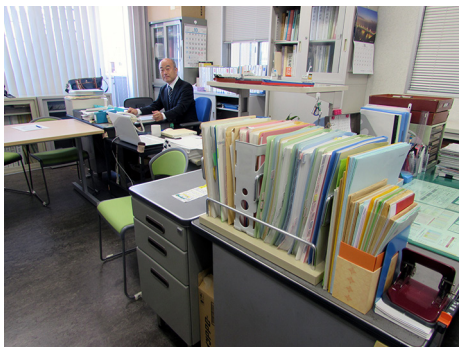
【沿革と概要】

四国地方海運組合連合会は、通称「四海連」と呼ばれ九海運、中海連に次ぐ規模である。この 3 つの連合会が全海運の“ご三家”的存在で、歴代の全海運の正副会長を選出している。

四海連にはかつて香川、徳島、愛媛、高知の四国 4 県をそれぞれ統括する内航海運組合が加入していたが、現在は油送船と愛媛の貨物船の大半がタンカー組合と全内船に加入しており、3 連合の中でも九海連、中海連とは異なる形態である。

四国は地域的に内航船主の密集度が最も高く、その中でも愛媛県には波方、今治、波止浜、伯方、大三島、宇和島、八幡浜、北条、松山など全国有数の船どころがある。愛媛県の内航船主が大挙四海連を離脱して全内船に移籍したのは昭和 48 年（1973）だが、それ以前から愛媛県では大型船が全内船、油送船がタンカー組合に加入しており、全海運傘下ではなかった。それは、全内船が発足の際に、日本船主協会（船協）の加盟事業者を参加条件

としていたからで、愛媛県下では船協加盟の大手貨物船船主が全内船、それ以外が愛媛地区海運組合を通じて全海運に加盟していた。



四海連事務局

ところが、全海運には縦割りの多重構造組織から、情報の伝達が不十分だとする不満が組織内に溜まっており、昭和40年代後半からこれが爆発する形で組合再編正論が全国で出始めた。愛媛県で全海運傘下の貨物船船主が大挙全内船に移籍したのはこれが要因で、全内船では受け入れ側の態勢として船協加盟事業者の条件を緩和している。全海運では組合組織の改善等に取り組み、態勢強化を図ったが、四海連の中では不満が解消されず、昭和50年（1975）には高知県海運組合連合会と香川県海運組合連合会傘下の香川県内航海運組合(県内航)が四海連を離脱して全海運に直接加入。さらに昭和61年(1986)には徳島県下の一部グループが離脱し、全内船に移籍する動きもみせた。

そうした中で四国の船主筋には、昭和58～59年（1983～1984）頃から長年の課題だった運送業者、貸渡業者別の組合縦割論が活発となり、昭和60年（1985）には全海運、全内船の垣根を越えて四国の船主が大同団結し、四国内航船主協会（四内協）を旗揚げ。昭和61年（1986）にはこれを発展的に改組するため西日本内航船主協会（西内協）と改称し、四海連事務局内に本部事務局を設置したのだった。しかし、内航5組合から離れた組合運営は、盛り上がりを欠き、平成2年（1990）に西内協は解散となった。

こうした経緯から全海運の構造改善と相まって、香川県下が香川県海運組合に一本化し、高知県連も県下3組合が統合して高知県海運組合となって全海運直結から四海連傘下に復帰した。また、徳島県下も7地区組合が徳島県内航海運組合に統合され、四海連の強化が図られたのだった。四国4県の海運組合の内、香川県海運組合と愛媛地区海運組合は県下単一組合だが、徳島県内航海運組合は旧地区組合の徳島、徳島内航船、小松島、阿南、阿南内航、南部、鳴門の地区海運組合が7支部となり、高知県海運組合も同様に宿毛、下田（のち解散）の組合が支部となった。

四海連の傘下組合員は令和2年（2020）10月1日現在（全海運調べ）で運送業者36社（17.3%）、貸渡業者133社（63.9%）、利用運送事業者39社（18.8%）の計208業者。所属船腹量は4県合計で291隻、416,343重量㌧で、取扱専業者を除いた1事業者当たりの所有船腹量は1.7隻、2,463.6重量㌧と比較的小型である。ちなみに、令和2年3月31日現在（国土交通省調べ）の運送事業者数619社と貸渡事業者数1,209社の合計は1,828社で、内航船腹量は5,225隻、3,941,198総㌧で1社あたり所有船腹量は2.9隻、2,156総㌧となる。

四海連のうち最も規模が大きいのは徳島県で85社（40.9%）、139隻（47.8%）、228,108重量㌧（54.8%）。これに次ぐのが香川県で58社（27.9%）、104隻（35.7%）、116,736重量㌧（28.0%）、以下愛媛県の42社（20.2%）、25隻（8.6%）、28,062重量㌧（6.7%）、高知県の23社（11.1%）、23隻（7.9%）、43,437重量㌧（10.4%）となる。

また、利用運送事業者を除いた1社当たりの所有船腹量でみると徳島県1.70隻、2,781.80重量㌧、香川県1.86隻、2,084.57重量㌧、愛媛県1.47隻、1,650.71重量㌧、高知県1.64隻、3,102.64となり、事業者数と船腹量が最もの少ない高知県の1社あたり所有船腹量が最も大きくなる。

四海連所属事業者数

令和2年10月1日現在　　全海運調べ

事業区分		香川県	愛媛県	徳島県	高知県	合計
運送業	登録運送業	13	11	10	1	35
	届出運送業	1	0	0	0	1
	計	14	11	10	1	36
貸渡業	登録貸渡業	41	6	71	13	131
	届出貸渡業	1	0	1	0	2
	計	42	6	72	13	133
利用運送業		2	25	3	9	39
合計		58	42	85	23	208

※休業中を除く

四国には、愛媛県に波方海上技術短期大学校、弓削商船高等専門学校の海技専門学校がある他、4県にそれぞれ香川県立多度津高等学校海洋技術科、徳島県立徳島科学技術高等学校海洋総合コース、愛媛県立宇和島水産高等学校海洋技術科、高知県立高知海洋高等学校と県立の水産系海事関係高校があり、さらに多度津、宇和島水産、高知海洋には専攻科もある。四海連では平成10年以降、毎年6校の就職担当の教員を招いて就職懇談会を開催、意見交換の場としている。

四海連の役員は会長と各県の組合理事長で構成する副会長4名、理事26名、監事2名で構成している。下部組織としてオーナー委員会、オペレーター委員会、砂利船委員会、諸法制検討専門委員会の4委員会があり、オーナー委員会にはワーキング・グループがある。

四海連は、四国運輸局管内の事業者で組織する四国地方船員対策連絡協議会の中心メンバーとして活動している。

四海連傘下では早くから、徳島県内航海運組合に青年部会、香川県小豆島地区に船主親睦団体があり、定期的に勉強会等を開催していたが、四海連としても青年部会を立ち上げ、中海連、九海連と連携を取りながら次世代の育成に力を入れている。

四海連の会長は、4県の持ち回りにで選出するようにしており、村田現会長は徳島県海運組合の出身で全海運副会長も努めている。

四国に政令指定都市なし

【四国の発祥と産業】

『古事記』の国産み神話によれば、四国は伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）により淡路島に続き、日本列島で2番目に創造された島であるとされている。古事記には「伊予之二名島（いよのふたなのしま）」と記されており、また『日本書紀』では「四国」を「伊予二名洲（いよのふたなのしま）」と表記している。このことから古代では四国を「伊予之二名島」「伊予二名洲」、または単に、「伊予島（いよのしま）」「伊予洲（いよしま）」、「二名島（ふたなのしま）」「二名洲（ふたなしま）」などと呼んでいたようである。「フタナ」は二並びの意である。四国は東が鳴門海峡、紀伊水道を隔てて近畿地方と、西が豊予海峡、豊後水道を隔てて九州地方と、北が瀬戸内海を隔てて中国地方と相対し、南が太平洋に面している。四国の名称は伊予、讃岐、阿波、土佐の4つの律令国が古くからあったことが由来で、それぞれ現在の愛媛県、香川県、徳島県、高知県とほぼ一致する。

しかし、明治の廃藩置県で現在の4県になったのでなく、紆余曲折を経たものだった。明治4年（1871）の廃藩置県直後は、江戸時代の藩がそのまま県に置き換えられただけだったので、四国には12県と他地域の飛び地があったし、全国的に大規模な府県統合が進んだ

四海連所属船腹量

令和2年10月1日現在　　全海運調べ

組　合	貨物船		油送船		曳　船		台　船		バージ		プッシャー		合　計	
	隻数	重量ﾄﾝ	隻数	5	隻数	PS	隻数	重量ﾄﾝ	隻数	重量ﾄﾝ	隻数	見做し重量ﾄﾝ	隻数	重量ﾄﾝ m³PS
四国地方海運組合連合会	201	304,425	53	60,552	1	2,000	12	11,258	11	33,520	13	4,588	291	416,343
香川県海運組合	68	90,987	23	18,071	0	0	7	6,522	2	617	4	539	104	116,736
愛媛地区海運組合	14	19,478	5	1,848	1	2,000	5	4,736	0	0	0	0	25	28,062
徳島県内航海運組合	100	155,594	23	36,683	0	0	0	0	8	31,960	8	3,871	139	228,108
高知県海運組合	19	38,366	2	3,950	0	0	0	0	1	943	1	178	23	43,437

明治９年(1876)には、四国が愛媛県と高知県の２県だけだったこともある。特に香川県は設置と編入が繰り返され、最終的な置県は明治 21 年（1888）となり、これは明治で最も遅く事実上の廃藩置県の最後だった。

高松港

また、天武天皇時代（673～686）に成立したといわれる古代日本の律令制の五畿七道（大和、山城、摂津、河内、和泉の５国と東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道の地理的行政区分）で淡路島は、現在の四国と同じ南海道であり、江戸時代には全域が徳島藩領となるなど、歴史的に四国と結びつきが強かった。しかし、幕末に徳島藩主の蜂須賀家と、その家臣で淡路島統治を任されていた稲田氏との間に確執が生まれ、維新後に徳島藩からの独立を画策した稲田氏を蜂須賀氏側の武士が襲撃する事件（稲田騒動）が発生した。この一件と国際港神戸を擁する兵庫県が領域を大きくしたい思惑が働き、明治９年（1876）に淡路島は兵庫県に編入され、以降は今日まで徳島県の管轄になることがなかった。

四国の面積は 18,803㎢（国土交通省国土地理院。2019）で全国の約５%、人口は 3,756,000 人で人口密度は 1㎢当り 200 人である。中心部を広く四国山地が占めており、過疎地が多い。四国４県の県民性は、概ね内海型と外洋型に分かれ、内海型の香川県や愛媛県の東予地方は性温順で争いを好まず、模倣や迎合の傾向がある代りに協調性に富む一方、外洋型の高知県や愛媛県南部の地方は、自らの信念を押し通すところがあるとされている。

また、四国全体は流罪の地であるが、特に高知は遠流の国として中央の政変のたびに、多くの貴人が失意の涙を流した所でもある。土佐の国守・紀貫之の『土佐日記』は、京への帰任の海路のつれづれを描いているが、当時の航海は海賊が出没するなど厳しいものであった。海賊の中でも、宇和海の日振島を拠点に活躍した前伊予掾藤原純友の反乱は、承平・天慶の乱として名高い。

四国を２分して縦断するものに平家伝説がある。それによれば、屋島の合戦に敗れた平家一族は安徳帝を奉持して四国山地に入り、愛媛県西端まで達したともされており、その道筋にはいくつかの行在所と陵墓を残している。中でも著名なのは、徳島県三好郡祖谷渓であり、高知県高岡郡越知町の横倉山である。安徳帝が入水したあとも、四国山地を縦断潜幸したと語り伝えられているのは剣山、石鎚山を頂点とする四国の山岳修行者の介在があったものと思われる。四国山地の怪異譚、地名の由来譚、集落の開拓譚、正月に餅を搗かぬ家や門松を立てぬ家などの伝承や習俗が平家伝説から派生したものが多いのも、大きな特色である。また、これら山地部では山伏系の神楽がみられ、木地師の伝承が多い他、剣山系、石鎚山系、黒尊川流域では、狩猟習俗で最も重要視されている熊狩り習俗と、その信仰が豊富で、そこには修験、陰陽師、吉田神道、熊野信仰などの影響がみられる。

中世の四国は混乱の時代であるが、室町幕府の守護職細川一族が讃岐、阿波、土佐に力を振るっていた。その後、阿波の三好氏が細川氏を倒して讃岐にまで進出すると、土佐では長宗我部一族が実力を蓄え、戦国末期の元親の代に一挙に四国平定の軍を起し、天正 13 年（1585）の春にほぼ全四国を手中にした。伊予で当時勢力を振るっていたのは、南予の西園寺氏と中予、東予の河野一族であるが、どちらも長宗我部氏の軍門に下った。しかし、同年７月には四国征伐の軍を起した豊臣秀吉の前に、長宗我部氏は降服して土佐一国を領有するに至り、阿波は蜂須賀氏、讃岐は仙石氏、伊予は小早川氏がそれぞれ入部し、関ヶ原の戦いののち、土佐は山内氏の所領となった。このうち、土佐（24 万石、朱印状 20 万石）、阿波（26 万石）は一国一藩のまま明治に至るが、讃岐は生駒氏の領有を経て高松藩松平氏（12

万石)、丸亀藩京極氏（6万石）の2つに分割され、京極丸亀藩はのちに多度津藩1万石を分家する。最も複雑な変動を示したのが伊予で、紆余曲折ののち最終的に、松山藩松平氏(久松、15万石)の他、その分家の今治藩（3万5,000石)、宇和島藩伊達氏（10万石)、さらにその分家の吉田藩（3万石)、大洲藩加藤氏(6万石)、その分家の新谷(にいや)藩(1万石)、西条藩松平氏（3万石)、小松藩一柳(ひとつやなぎ)氏（1万石）の8藩に分割され、川之江・別子地方は天領となった。伊予の細分割は、各藩の財政難を招き、伊予の七ツ免（村高の7割を徴集）といわれる高率年貢を課したので、百姓一揆が各地で多発した。

新居浜市街と住友化学の愛媛工場菊本地区付近
（写真提供:PIXTA）

藩政時代の四国の特産物には讃岐三白(さんぱく)の塩、綿、砂糖、阿波の藍、伊予の木綿、土佐の和紙などがあるが、明治以後急速に衰えた。しかし、そのうち讃岐の塩だけは、専売制の下で発展を続け、伊予木綿は今治のタオル産業に引き継がれた。

四国山地は南四国に多雨、北四国に寡雨という自然気象をもたらしているが、それは四国の生業やそれに伴う習俗にも投影されている。北四国では溜池が多く、雨乞い信仰が顕著に分布している。元来、盆の奉納芸能であった鐘踊(かねおど)り、太鼓踊りが雨乞いに奉納され、南四国では同じ盆の芸能が秋の豊作を祝って奉納されるという変容をみせている。民家習俗でも、南四国では山麓で産出される石灰を用いた白壁造りの家が多く、風雨による壁の崩壊を防いでおり、軒先も低い。これに対して、北四国では土壁の家が多く、軒先を高くして風光を大きく取り入れている。

また、北四国の内海、南四国の外洋という地勢的差異は、内海漁業と沖合漁業という漁法の違いをみせ、漁労組織習俗はより協同作業を必要とする南四国沿岸部に発達している。内海と外洋の海の表情の違いは祭礼習俗の中にもみられ、宇和島市三浦半島の盆の踊り舟、諫踊(いさおど)り、松山市興居島(ごご)の和気姫(わけひめ)神社の船踊りや櫂伝馬(かいでんま)などのように、海上に舟を浮かべて先祖霊を供養する祭式が多いのは、穏やかな瀬戸内の海でこその伝統で、波濤の砕け散る南四国の海辺では、八幡舟を載せた台車が町中や参道を行く風景となる。

四国4県をひとつに結ぶものに金毘羅(こんぴら)信仰がある。瀬戸内では海運業の盛んなところから流し樽の習俗がみられ、海上安全の祈願と結びつく。南四国では稲作や家内安全の祈願と結びつき金毘羅講を形成し、それによって得た見聞は習俗の伝播(でんぱ)にも役割を果たして来た。

林業は、南四国が温暖な気候と多雨のため、杉などの美林が多く、特に徳島県の木頭(きとう)、高知県の魚梁瀬は林業地として知られる。林業副産物としては、和紙の原料のミツマタ、コウゾの生産が多く愛媛、高知両県で全国生産の半分以上を占める。

四国4県の中で最も労働生産性が高いのは徳島県で唯一、全国の水準を 上回っている。 最も低いのは高知県で、四国の中でも最高と最低で160万円 程度の差がある。徳島県が全国の水準を上回ったのは平成25年（2013）度が初めてであり、それ以前は四国4県とも労働生産性は全国の水準を下回っていた。

四国の地質上、鉱産資源は乏しく、従来銅鉱、石灰石の他にみるべきものはない。江戸時代中期から採掘が進み、日本三大銅山のひとつに数えられた愛媛県の別子銅山も昭和48年（1973）に閉山した。

徳島港と市街地（写真提供:AFLO）

四国では東予地区と徳島臨海地区が新産業都市に指定

されているが、期待したほどの発展ではなかった。四国の製品出荷額の全国比は2.7%に過ぎない。東予地区では、住友系を中心にした新居浜、西条地区の重機械、化学、アルミニウムコンビナートが四国を代表する工業である。西条には近年、半導体やビールなど用水型工業が進出している。四国中央市の川之江、伊予三島地区にはパルプ、製紙工業が集中している。徳島県の吉野川河口には、豊富な地下水、地上水を利用して東亜合成、東邦テナックス(旧東邦レーヨン)、日清紡、四国化成、大塚製薬などの化学工業団地が立地する。香川県の番の州コンビナートには川崎重工業の造船、三菱系のコークス、YKK などがある。松山臨海部は帝人系と丸善系の石油と化学繊維コンビナート、さらに高知臨海部にはセメントと電気化学工業の工場が立地する。

高知港（写真提供:AFLO）

四国の近代工業は装置系、原料加工系の工業で、構造不況業種に属するものが多い。一方、地場産業も種類は多いが、これも輸出環境の悪化などでいずれも苦しい状況といえる。「伝統工芸品産業」の指定を受けているものに、香川県の蒟醤(きんま)塗、象谷(ぞうこく)塗などの漆器、丸亀市の団扇、徳島県のしじら織、阿波和紙、高知県の土佐和紙、愛媛県の大洲和紙、砥部焼があり、特殊技術をもって安定している。その他、代表的な地場産業を挙げると、徳島市の鏡台や箪笥、香川県東かがわ市の手袋、同さぬき市大川町のボタン、同小豆島の醤油、愛媛県今治市のタオルと縫製品、四国中央市の水引、製紙などがある。

瀬戸内海側では、温暖な瀬戸内海気候の影響で年間降水量が少ない。そのため、渇水が起きやすいので平野部には大抵、溜め池などがある。また台風があまり襲来することも少ないのでオレンジやオリーブなどの農作物の栽培が盛んである。

愛媛県は広島県と大分県、香川県は岡山県、徳島県は近畿地方に風土が似ており、高知県は陸路が険しく船での往来が発達した関係上、古くから上方や京都、近世は江戸からの影響も強く、政治・文化的な中央への意識が高いとも言われている。四国の太平洋側では太平洋気候の影響で温暖である。四国はまた、年間降水量が多いので林業が盛んだが、台風来襲や集中豪雨も多い。

四国で一番人口が多いのは松山市（52万人)、行政規模が大きいのは高松市（42万人）である。基本的にどの県も海沿いに街が栄えているため、四国山地付近は日本有数の秘境となっている。

四国と本州は、3つの橋で繋がれているが、通行料金が極めて高い。だが、これを安くすると下を通るフェリーが打撃を受ける。

四国に政令指定都市が存在しないのも特徴である。条件となる人口70万人を突破するためには、松山市は中心市街地が離れている今治市と、高松市に至っては周りの全てとの合併が必要であり、合併による政令都市化は現実的でないとされる。高知市、徳島市は県の人口自体が80万人を割っている。

四国の域内総生産は13兆40万円（2006）で、世界と比較するとニュージランドよりも大きく、ルーマニアと同規模である。四国というよりは我が国の地方の特徴であるが、自家用車保有率が高い。1世帯に2台は当たり前。移動手段も自動車がメインのため、鉄道や路線バスなどの公共機関が衰退気味だとされている。